



「なら、をかし」

美術科・国語科 教科横断的版画表現

2年生 奈良市立伏見中学校 桑村 直弥

1. はじめに

中学2年生の国語科で学習する短歌では31音の言葉の連なりに乗せて、心情や感情を季節や温度や質感が伝わる繊細な日本語ならではの表現で表される。言葉の持つ観念的性格を、版画として可視化し視覚的表現に広げていくことで作品イメージやその世界観がより豊かに広がっていくことが期待できる。また版画という表現が元来の性格として大量生産して流通させる出版物であったことから、言葉と絵画の親和性は過去の様々な版画家、作家の作例を思い浮かべても納得できるだろうと思う。「なら、をかし」というテーマで自分なりに奈良という地域の良さを捉えて短歌として表現し、それを基に版画を作る。以上の工程を通して国語科との教科横断的取り組みによって美術科としてより深まりを持った課題の取り組みができるものと期待している。

2. 実践の概要

【題材名】

「なら、をかし」

A表現(1)ア(2)ア B鑑賞(1)ア

【共通事項】(1)アイ

【目標】

- ・言葉を愛好し、親しみ、それを基に絵画表現的なイメージを豊かに広げて、その世界感を版画に表すように、表現を工夫して制作に取り組んだ。(観点Ⅰ)
- ・版画に親しみ、短歌の意味を咀嚼しながらその構成を工夫して表現に取り組んだ。(観点Ⅱ)
- ・教科横断的取り組みによって生徒の興味関心を広げてイメージの生成方法を幅広くし、日本の風土、特に現在生活する奈良という地域の魅力について味わって制作にその意図を表すために思考を深めて制作に取り組んだ。(観点Ⅲ)

3. 活動の内容・方法

第1次

国語科で作った短歌を基にイメージを広げてハガキ大サイズの版画の構想を練る。版画表現の特徴である白黒のバランスや構成にも工夫を促す。制作では、彫りのタッチを工夫することで鉛筆や筆で描くこととは違う味わいが生まれることを意識させる。また元となった短歌の版画も同様に構成、彫りを意識して制作する。



第2次(1時間)

出来上がった絵と言葉の版画作品をそれぞれ読み札と取り札としてカルタ形式の鑑賞体験を行う。

4. 成果と課題

短歌を発想の出発点とすることで、作品に表したいイメージや情景の生成がより具体性を持って構想できているように感じた。

カルタ形式の鑑賞活動の取り組みによって、作者自身の意図や工夫を実感として確かめられる機会を作ることができ、また鑑賞者として作品を読み解く力を養い、同時相対的に「自己表現」の在り方について思考を深めることができると期待できる。

